



編集兼発行
公益財団法人 小笠原協会
東京都港区海岸 1-12-2
竹芝客船ターミナル2階
電話 03-3432-4921
FAX 03-3432-4487
振替貯金口座(郵便)
00190-9-64610
みずほ銀行芝支店
普通 3242428

小笠原諸島返還50周年 記念シンポジウム

小笠原支庁の主催で平成30年5月24日(木) 東京都議会議事堂1階の都民ホールで、大盛況のうちに小笠原諸島返還50周年記念シンポジウムが開催された。

開会に先立ち、小笠原古謡唄うたい「oke」さんによる小笠原古謡(レモン林など)を、フラダンスとともに披露、参加者は優しい調べに魅了された。



開会にあたり小池百合子東京都知事は、小笠原諸島が、日本の海域の拡大に果たす役割に触れつつ、展示やシンポジウムで小笠原を知って欲しいとのご挨拶で幕を開けた。

続いて、「さかなクン」が小笠原諸島PR大使に任命され、小池百合子都知事から任命書が、森下一男小笠原村長から大使のタスキが渡された。東京海洋大学名誉博士・客員准教授でもある「さかなクン」からは、都知事の質問に答える形で、早速、小笠原の魅力「美しい海や星、おい

しい島寿司やおさかな」のPRがあった。

その後、首都大学東京の菊地俊夫教授の小笠原諸島のガイダンスから始まり、小笠原の特異な歴史や海洋資源保全に果たす役割についての基調講演、小笠原の未来を展望するパネルデスカッションがあった。



講演及びシンポジウムでの各氏のご発言の要旨は以下のとおり。(紙面の都合上、ご講演とパネルデスカッションでのご発言の要旨を合わせて記載した。)

「小笠原諸島の概要、振興開発とその取り組み」

(首都大学東京教授 菊地俊夫氏) 小笠原諸島は、本土とミクロネシアのほぼ中間に位置し、日本列島からは約1000キロ、マリアナ諸島から約500キロ離れ、どの島も成立以来、大陸と陸続きにならなかったことがない。そのため



動植物の固有種も多く非常に豊かな自然を抱える海洋島であり、我が国の排他的経済水域の3割を確保する拠点となっている。

主要産業の一つは観光業であり、今後は適正な規模とされる年間約3万人程度の観光客の受入数を維持しつつ小笠原ならではの食文化や歴史、豊かな自然などを観光とつなぎ合わせ、農業や水産業の発展にも寄与するような、付加価値を高めるための仕組みづくりが必要である。また、海の行事への参加傾向など観光客の行動パターンに着目した対応や、体験型、教育型旅行によるインバウンドの確保、南太平洋大学のような各島への分校配置などの可能性もある。

「小笠原諸島が歩んで来た 特異で複雑な歴史」

(明治学院大学教授 石原俊氏) 小笠原諸島は、1830年に約25人が最初に定住を開始して以降、世界中から様々な



人々が上陸し、西太平洋の交通拠点として発展した。当初の約半世紀間は、どの国家にも属さない自立空間のような地域であったが、1876(明治9)年、日本政府は諸外国に領有を認めさせ、先住者を日本に帰化させるとともに、小笠原への入植を開始した。

小笠原諸島では、1920年代には糖業、1930年代からは、温暖な気候を活かして野菜を冬場の京浜市場などに出荷するなど多くの利益を上げ(その他、硫黄島ではコカ栽培)、黄金期と言うべき時代を築き上げた。しかし同時に1920年代以降、小笠原諸島の軍事要塞化が進み、1944年には島民約7千人が強制疎開させられ、人々は長年築き上げてきた生活や産業の基盤を根こそぎ奪われた。

また戦後は、米国の施政権下のもと欧米系島民のみ帰島が許された。しかし、それ以外の島民は、1968(昭和43)年の返還まで帰島がかなわず、硫黄島は返還後自衛隊の管理下におかれ未だに帰島が許されていない。一方、占領下の小笠原では自然破壊が進まなかったことが、後年の世界遺産登録に繋がった。今後、小笠原の歴史や文化の発信力を高めれば、さらに観光客を呼ぶことが可能になる。またかつての南洋航路のように、月1便でもサイパン、グアムから東京への便などを検討できれば夢は広がる。

「海洋資源保全等の面で 小笠原諸島が果たす役割」

(東海大学教授 山田吉彦氏) 中国やロシアなどの船が世界と行き来するためには、必ず日本列島を横切る必要がある。その日本列島を遠巻きに、要のように守る位置にあるのが小笠原諸島である。一方、我が国の排他的経済水域の約3割を構成する広大な小笠原の海には、豊富な水産資源のほかメタンハイドレード(海底に眠るシャベット状の天然ガス)や希少金属が溶け込む海底熱水鉱床などがある。今後、日本にとって太平洋の海洋調査は重要な課題である。豊かな海洋資源を抱える小笠原の海をしっかりと守るために、島の人々が、潤い、幸せに暮らせるように考える必要がある。このため小笠原が抱える魅力的な水産資源や環境を活かして、新しい「メニュー」を開発・提供するなど、観光資源としての付加価値を高めることが重要である。国内自給率は60%だが、省エネ船の開発や冷蔵・冷凍輸送技術、鮮度管理技術の進歩によって、自給率は上げられる。今後、熟成食材で食べごろの時期に提供するなど、食材の付加価値を高めることも可能だ。

一方、小笠原の財産は豊かな自然にある。小さな小笠原の島では滑走路にも制約があるが豊かな自然を守りながら、島民の安定的な生活を確保する必要がある。また、エコリズムを基軸とした観光が伸びている。安定的に発展していくためには現在の年間3万人程度の観光客の規模が望ましい。そうした中で、様々な需要の高まりに応じて、観光や商品の付加価値を高めれば地元産業の振興にも寄与できる。売れるから作るという生産、経済の好循環が可能になる。

「小笠原村における振興・開発の現状と課題」

(小笠原村長 森下一男氏) 本土と小笠原を結ぶアクセスは、6日に1便の所要24時間を要する船便に限られ、人や物の移動には大きな制約がある。また、船の運航スケジュール上、村民は内地で一つの用事を足すために10日かかる。父島を午後3時半に出て、竹芝には翌日午後3時半に到着する。おがさわら丸は到着の翌日午前11時には、小笠原に向けて出発する。島民

は、内地での用事を足すためには、もう一便待って帰らざるを得ないため最低10日程度必要になる。水産物等の内地への出荷も、市場動向等を踏まえた柔軟な対応が難しい。また、島の医療には制約があるため、現在では高齢者の医療や出産も島外(内地)での対応が原則となっている。島民の安定的な生活のためには、航空路の整備による交通事情の抜本的な改善が不可欠である。中国船の珊瑚密漁船団が沖合間近に迫り、島民に大きな不安が広まったことは記憶に新しい。国境離島という意味や役割を多くのの人々に認識してもらう必要がある。一方、小笠原の財産は豊かな自然にある。小さな小笠原の島では滑走路にも制約があるが豊かな自然を守りながら、島民の安定的な生活を確保する必要がある。また、エコリズムを基軸とした観光が伸びている。安定的に発展していくためには現在の年間3万人程度の観光客の規模が望ましい。そうした中で、様々な需要の高まりに応じて、観光や商品の付加価値を高めれば地元産業の振興にも寄与できる。売れるから作るという生産、経済の好循環が可能になる。

平成30年度小笠原諸島
振興開発事業費予算
19億2千100万円

小笠原諸島振興開発特別措置法に基づく振興開発計画(平成26年度から平成30年度)は、最終年度を迎え、開発計画の諸事業は、自然環境の保全との両立を図りながら、計画達成に向けて着実に推進されている。

現行計画のもとでは、おがさわら丸、ははしま丸を更新

し、旅客定員数及び貨物搭載量の拡大とともに高速化を図り、小笠原諸島の島民生活の安定と産業振興に大きく寄与した。また、貴重な自然環境の保護と適正利用の両立を図り、地域の発展に寄与するエコリズムを推進し、南海トラフ地震等に備えた新たな防災対策の強化を図るなど、地域の創意による自立的発展に向け、取り組んできた。

今年度は返還50周年という大きな節目を迎えるが、昭和43年の返還から、小笠原を取り巻く生活環境や産業構造、村民ニーズも大きく変化してきた。また、50年という歳月により、老朽化した施設の更新や産業構造の変化など、新たな課題が生じている。

振興開発事業の概要

平成30年度の事業費は19億2千100万円となり、平成29年度の事業費19億6千700万円から約2%の減

1 小笠原諸島振興開発事業費補助

5ヶ年計画の最終年度であり住民生活の安定と定住の促進、小笠原の自立的発展の根幹となる産業基盤施設等整備事業を実施

① 産業基盤施設等整備費

港湾整備(都事業)
二見港岸壁の改良工事、沖

② 診療所運営(村事業)

診療所の管理運営、スタッフや機材の確保等の整備運営

③ 各種調査(都事業)

観光振興事業として、外国人旅行者受入環境の現状調査。

は、旅客定員数及び貨物搭載量の拡大とともに高速化を図り、小笠原諸島の島民生活の安定と産業振興に大きく寄与した。また、貴重な自然環境の保護と適正利用の両立を図り、地域の発展に寄与するエコリズムを推進し、南海トラフ地震等に備えた新たな防災対策の強化を図るなど、地域の創意による自立的発展に向け、取り組んできた。

◆ 都市公園(都事業)

大神山公園の景観整備、施設拡充、急傾斜地対策推進

◆ 生活基盤施設等整備費

道路整備(都道、村道)

◆ 都道(都事業)

父島湾岸通りで災害防除、母島北進線では災害防除・道路拡幅

◆ 村道(村事業)

母島沖村9号線新設工事

◆ 生活環境施設等整備

簡易水道(村事業)

◆ 父島第2原水調整池の躯体

築造、母島浄水場の改良工事

◆ し尿処理施設(村事業)

父島し尿処理施設の汚泥処理設備の改良工事、母島村道新設に伴う管渠新設工事

◆ 保育施設(村事業)

母島の保育施設整備に向けて、斜面対策と敷地造成設計

◆ 砂防(都事業)

時雨川の砂防対策工事実施

2 小笠原諸島振興開発費補助金

① 病害虫等防除

ア 防除(都事業) ミカンコミバエ再侵入警戒調査等継続試験研究(都事業) ミカンコミバエ等の指定病害虫及び一般病害虫防除の試験研究

返還50周年記念
式典開催される

この6月30日父島で、石井啓一国土交通大臣、小池百合子東京都知事等を迎え、小笠原村の実行委員会主催の返還50周年記念式典が盛大に開催された。森下一男村長は、強制疎開、返還運動、返還への道のりや、50年の復興の歴史を振り返るとともに、後世に歴史を伝えつつ魅力ある村づくりへの決意を述べた。小池都知事は、小笠原諸島の復興を讃え、島民及び関係者の50年間のご苦労をねぎらった。そして今後、島民の生活の安定のために、空路が必要であり、洲崎地区を中心に空港整備を検討することを表明した。

また、東京新宿では、6月26日に、当小笠原協会主催で在京の協会役員や元支庁長等と記念祝賀会を開催し、来賓として今村雅弘前復興大臣・衆議院議員、三宅正彦都議会議員、小笠原村長代理らが出席された。ともに詳細は、本紙次号10月1日号に掲載します。

なお竹芝第2客船ターミナルの記念パネル展示は9月末まで開催予定。

小笠原諸島
返還50周年記念事業
Bonin Bon-Odori Festa

竹芝で、小笠原の盆踊り大会が開催されます。熱気あふれる小笠原の盆踊りのほか、小笠原古謡、Jazzライブのステージや小笠原の特産品の販売や飲食販売コーナーなどなど盛り沢山。

【主催】小笠原諸島返還50周年記念事業実行委員会
【日時】平成30年9月29日(土) 15時から20時30分

島自慢2018開催

2年に一度の島自慢「伊豆諸島、小笠原諸島の魅力発信」が、この5月26日(土)と27日(日)の両日、竹芝桟橋で開催された。主催は、島自慢実行委員会と伊豆諸島、小笠原諸島の各町村で、各島の名産、食材や焼酎が販売されていた。居



【会場】竹芝客船ターミナル
【イベントの概要】

- ① 竹芝で再現！小笠原の盆踊り大会
- ② 歌い継ぐ 小笠原古謡ステージ (Okie氏、松永希氏(元リングリンクス)、他)
- ③ Jazzライブステージ (Ricky with FSP)
- ④ 小笠原の歩みと常識再確認！
- ⑤ 小笠原の特産品即売
- ⑥ 小笠原で活躍する料理名人による飲食販売コーナー
- ⑦ 写真展示・映像放映



ながらにして各島々の食や芸能を楽しめるとあって両日も広場に人が溢れる大盛況ぶり。舞台では、各島自慢の太鼓、踊り、獅子舞などが披露された。小笠原からは南洋踊り&KAKA、小笠原フラが披露され、おがじろうも登場。パッションフルーツ、魚介類やラム酒などが売っていた。

返還50周年記念特集
「強制疎開と苦難の道」

太平洋戦争中、小笠原は本土防衛の前線基地となりました。

昭和19(1944)年、戦況の緊迫、小笠原に対する米軍の攻略は必至との情勢に備えて、大部分の島民は、日本軍の強制引揚げ命令によって本土に疎開させられました。

所持品は身廻品一人当り3個に限定され、それ以外は一切のものを島に残すこととされました。しかし、その3個に制限された荷物も、港の波止場で焼夷弾に焼かれ、何一つ持たず命からがら乗船した人も少なくなかったという事です。

いづれの引揚げ船にも駆逐艦が護衛として並走し、船内はぎゅうぎゅう詰めの蒸し風呂状態で、異臭が充満し、船

(1) 引揚げ船の様子

酔いする人が続出。航行中には敵の潜水艦接近の情報が入ったため、甲板に集合させられ、救命具を着用したまま、恐怖と不安に脅かされた時間を過ごし、死を覚悟した人もいたそうです。50時間にも及ぶ航行で島民はみな疲労困憊で本土にたどり着きました。

初めて見る内地の風景に子ども達ははしゃぎしたそうですが、大人たちは、これからの生活を考えると不安感で一杯だったそうです。引揚げは数回にわたり暫時敢行されて、4月～8月初旬までに全島民の引揚げは完了しました。8月初旬の引揚げ時には出港後まもなく敵の襲撃に遭遇し沈没し、傷病兵を含む島民13人の命が失われました。強制引揚げを命ぜられた人々は、当時の小笠原の人口7,711人のうち6,886人でした。

(2) 硫黄島に残された島民の様子

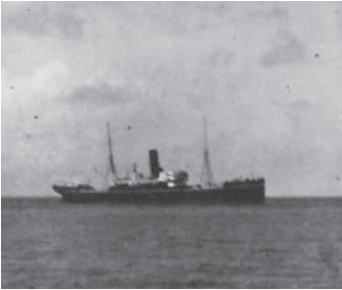
軍属として小笠原に残った人達825名は、それぞれの業務に励み、労務班は明けても暮れても壕掘りであった。仲仕班は輸送船の荷役作業、漁業班は毎日2回の空襲の間を縫って漁獲をつづけ、幾度か空襲に遭い数名の犠牲者を出した。

農業班は新鮮な野菜の供給を担うなど島民の勤勉と実直は賞賛されたが、軍事徴用された欧米系の島民が虐待されたという記録も残っています。

(3) 本土での引揚げ島民の生活

本土に引揚げて来た島民は、全ての財産を島に残し、着のみ着のままの姿で本土の土を踏みました。その大半は、身寄りもなく、寺院、学校等で集団生活を営み、逐次全国各所に分散して行きました。清水市に在住する金指造船所の社長金指吉昭氏が、漁業会社設立に際し、島民の窮状

昭和19年4月の小笠原の人口			
父 島	799戸	4,348人	
母 島	341戸	2,109人	
硫 黄 島	216戸	1,164人	
北硫黄島	17戸	90人	
総 合 計	1,373戸	7,711人	

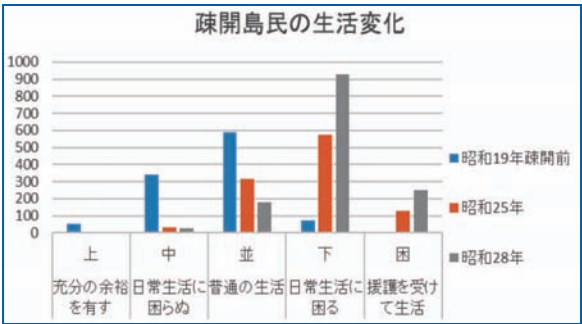


引揚げ船 芝園丸、利根川丸、能登丸

を伝え聞き、船員を島民に限定し募集し採用してくれました。

社長は次々と新船を建造し船は島民で固めた。(50年誌「清寿漁業について」参照)更に社長は、造船所にも多くの島民を採用した。清水港周辺は、数百人の島民が移動移住し、小笠原村の様相であったそうです。

引揚げ後の島民の生活状況は、昭和25(1950)年及び昭和28(1953)年の2回にわたって東京都と小笠原婦郷促進連盟とが共同調査を行い、昭和19(1944)年の引揚げ前の調査と対比した。



硫黄島からの引揚げの証言

硫黄島では最後の引揚げと言われた日、早朝夜の明けぬうちに、徒歩で乗船のため中海岸に向った。海岸の砂浜には、艦砲射撃の不発弾が一升ビンを乱立させたように続いていた。不発弾を縫うようにして乗船場へたどり着いた。引揚げ船は小型の漁船が5隻であった。乗船が終了して父島へ向け出港する船を見送る残留の大勢の人達が海岸にいつまでも見えていた。

引揚げ後の島民の生活状態は、大部分は、資本もなく縁故もなく、その生活は窮乏を極め親子心中の悲劇も起こりました。

島民の多くはいつか帰島が出来ると信じていたため、本土で恒久的職業に就こうとしない傾向があり、これが生活を困難にした一因ともなっていたようです。また、もう帰れるか、もう帰れるかと思いついて、昭和22年(1947年)7月小笠原婦郷促進連盟を結成し懸命に帰島の陳情を続け、中には、引揚げ以来死んだ家族の遺骨を抱え、島の先祖の墓地に埋めるのだと言っている人もいたそうです。



小笠原ファンを作ろう

賛助会入会のご案内

賛助会員の皆様には、大変お世話になっております。当協会は、小笠原諸島の旧島民の方々の帰島支援や機関紙等の発行、交流ツアー開催、イベント出展などにより広く全国の皆様の小笠原諸島へのご理解を求め、小笠原村の復興支援の活動を進めています。これらの活動は賛助会員の皆様方の会費収入に支えられており、深く感謝申し上げますとともに、引き続きのご支援をお願いいたします。また、新たな皆様にも、協会の活動の趣旨をご理解いただき、賛助会へのご入会をお願いしています。当協会のホームページをご覧ください。お電話いただければ、入会申込書を送らせていただきますので、宜しくお願い申し上げます。

30年度賛助会員更新手続き

平成30年度の賛助会員更新の手続きにつきましては、本年4月に、会費納付書(振込書)をお送りしました。ご不明の方は、協会までご連絡ください。30年度の個人賛助会員証につきましては、納金が確認出来次第お送りいたします。

なお、旧島民及び関係者(ご子孫、配偶者等)の方は、おがさわら丸の割引対象です。割引証明を受けられる方は、従来通り小笠原協会にお電話ください。

小笠原諸島返還50周年記念 「小笠原 ⇐ 1,000km ⇒ WAON」

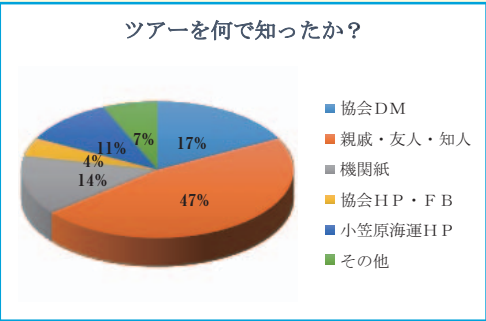
小笠原村とイオンリテール株式会社が提携し、小笠原村の発展・振興を目的にこの2月から発行されています。このカードを利用すると利用者にポイントが付くほか、支払額の一部が小笠原村に寄付されます。村では世界自然遺産の小笠原諸島の自然環境保護に活かしていきたいとしています。東京都内のイオン、イオンスタイル、ザ・ビッグで購入できます。発行手数料は300円

平成29年度 第18回小笠原訪問・交流ツアーアンケート結果

平成 29 年 10 月 31 日(火)～ 11 月 5 日(日) 参加人数 183 人
旧島民 14 人、賛助会員 29 人、一般 136 人、協会スタッフ 4 人
アンケート回収 78 人 回収率 44.8%

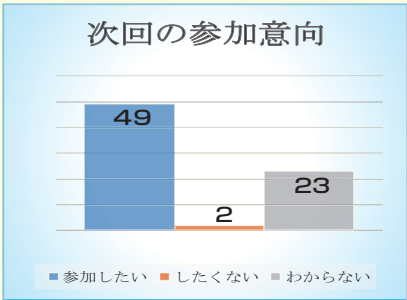
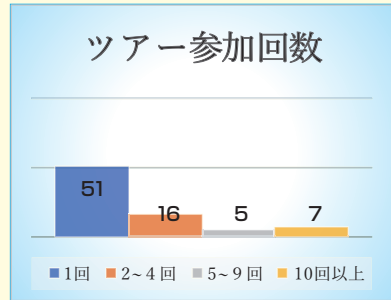
1 ツアー満足度

連日雨のツアーであったが、大変満足と満足が 65 人（84％）満足度は高い。一方で、雨の対策が必要なことも実感した。



- 小笠原の自然を満喫し、祭りや太鼓、南洋踊り等の文化にも触れあえた。今まで一番充実した旅でした。地元の歓迎会はとても良かったです。感謝しています。
- 交流会では島の伝統芸能を見ることが出来て、島の人たちや参加者と話が出来て良かった。出来れば、来た人も参加して踊ったりしたかった。
- 初めての小笠原のみなさんととてもフレンドリーで親切だった。島民の方々の熱意を感じました。自然環境、植物の多さが素晴らしかった。
- 宿のご夫婦が心を込めた接待をしてくださった。温かなもてなしを受けました。
- おもてなしの気持ちが良かったが、宿の施設面は不十分であった。
- 星を撮ることを目的にして行ったが、3日間ともに雨・曇天で星が観られなかった。
- 雨の場合の過ごし方・・・タコの葉細工とか。まさかの悪天候。その時に遊ぶものを考えていなかった。
- 小笠原訪問では天候が多くの要素である。天気の悪い日の対策が欲しい。雨天が多かったので、雨の日のイベントを企画してほしい。天候に左右されないイベントがあれば嬉しい。
- 天気の悪い時に出来る参加型イベント。物作り、料理（島寿司）等、音楽会（ドラム）

2 参加回数・次回の意向

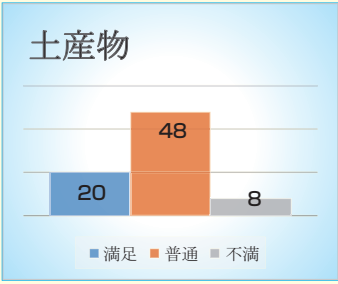


51 人（65％）の人が初めての参加だった。最多の 18 回（ツアー開始から毎回参加）は 1 人。次回（今年）の参加意向も 49 人（63％）と高い。満足度の現れであるが、次回は分からないとの回答も 23 人（30％）あった。

4 お土産

大変満足と満足で 68 人（87％）と満足度は高い。一方、多様な意見があった。買い物情報の不足か。

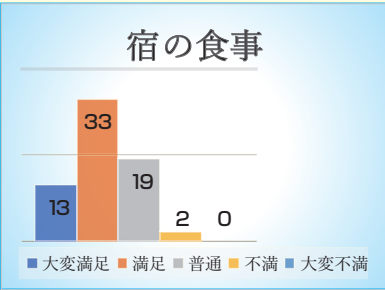
- 島にしかない物が多くて良かった。島オリジナルのものがたくさんあってよかった。
- 思ったよりは種類が多かった。塩の種類が多くて楽しい。
- 品揃えは多いが、少々高い。
- 島の材料などで作ったものがあるので良かった。柚子胡椒、缶酎ハイ、塩など
- 豊富にあった。特色のあるものも多かった。毎年新しい商品が増えて目新しかった。色々なバリエーションの土産があった。
- 品物が多くない。数に限りがある。産物が少ない。
- 果物や産物の品揃えが少ない。
- 特産品が少ない。特産品などがわからなかった。島の特産品を増やしてほしい。
- 小笠原で製造されている品が少ない。
- 地元産のものが少ない。レモンがもっと欲しかった。
- もう少し種々量的なものがあれば良いと思う。種類がない
- お土産の店が 1 店なのでもう少し多ければ・・・
- もう少し考えた方が。現状のままで良いのか？
- 島の果物を農協で販売していた。
- 小笠原にしか出回らない亀肉、果物がある。小笠原にしかないものがある



3 宿の食事

宿の食事は、大変満足と満足合わせて 56 人（72％）と満足度が高い。島の食材が好評。

- 島の食材、伝統の料理に大変満足しました。
- 島のもの、魚、野菜が食べられた
- 島の食材を使った物を用意してくださった。
- 毎食ごとにおいしい島の魚を工夫してくれた。
- 小笠原特有のメニューの増加を望む。味も素材も良かった。
- 島の魚、カンパチ、メカジキ、四角豆もおいしかった。
- 家庭的ではあるが、日常と変化がないことが寂しい。
- 生野菜、フルーツが全くなかった。



5 その他（交流会・イベント等）

宿の食事は、大変満足と満足合わせて 56 人（72％）と満足度が高い。

- 交流会のごちそうありがとうございます。
- 交流会の企画に感謝します。個人では情報が少ないのでありがたかった。
- 初体験ですが、小笠原とつながる交流会を知り大変良かったです。
- 特に母島での交流会は人数が少ない分親密感があって良い。
- 帰りの船の見送りに感動した。
- バスの便数を少し増やしてほしい。
- 船旅の楽しさを味わいました。
- よいツアーを紹介していただきました。初めてで一人での参加でしたが、多くの方々と楽しい会話がはずみました。船中、宿、参加イベントが出会いの場を提供してくれた。
- 島内自由行動なので、自分でじっくり自分のペースで回れるのが良い。
- 小笠原の自然の保存に様々な方法で多くの人が努力されていることを知りました。
- 手つかずの自然を楽しめました。
- 船中でもなにかイベントがあれば良いと思った。
①ミニマラソン、②オリエンテーリング、島一周、展望台などのフォトスポット巡り
- 南島に上陸できず、帰る日の午前にツアーを探したが見つからなかった。そういう場合の情報が欲しかった。

返還50周年記念 今年こそ行こう!小笠原

第19回 「小笠原訪問並びに交流ツアー」

ツアー期間	平成 30 年 10 月 31 日（水）から 11 月 5 日（月）までの 5 泊 6 日（民宿・ホテル等に 3 泊）※延発コースは実施しません
イベント主催	公益財団法人 小笠原協会（Eメール kzho@ogasawarak.jp ） ☎03-3432-4921 fax 03-3432-4487
旅行主催	小笠原海運株式会社（東京都知事登録 2-2135） ☎03-3451-5171 fax 03-3451-4522
後援予定	小笠原支庁、小笠原村役場、小笠原村観光協会、小笠原母島観光協会、 小笠原島漁業協同組合、小笠原母島漁業協同組合、小笠原村社会福祉協議会、 小笠原村商工会、東京島しょ農業協同組合小笠原父島支店・母島店
募集期間	平成 30 年 7 月 25 日（水）～9 月 28 日（金）
募集人員	200 名（最少催行人員 50 名） 期間内に募集人員に達した場合は、受付を締切ります
参加対象	小笠原関係者及び小笠原を愛する人並びに未訪島の人



参加費（子供：6 歳以上 12 歳未満）

	宿付き		乗船券のみ	
	大人	子供	大人	子供
2 等和室	61,000	37,000	37,000	20,000
2 等寝台	66,000	40,000	42,000	23,000

- 宿付きコース参加費には、竹芝・父島間の等級別往復運賃と 3 泊の宿泊代（朝食 3・夕食 2 付）及び旅行傷害保険料等が含まれます。
- 乗船券のみのコースの方は、宿泊代は自己負担となります。
- 宿付きコースの宿泊先は、小笠原海運にて手配となります。お客様でお選び頂けませんのでご注意ください。また、同宿 3 泊のみの手配になりますので、父島・母島両島に滞在希望の方は、乗船券のみのコースをお選びし、宿はご自身で手配ください。
- 宿泊を一人で一室使用の場合は、**シングルチャージ 6,000 円が発生します（3 泊分）**
- 航海中の食事代、島での昼食代及び父島・母島間の運賃は自己負担です。
- 船賃無料の未就学児で宿泊施設を利用する場合は、現地に別途宿泊料が必要となります。
- 宿付きコースで母島宿泊希望の方は、**小笠原協会・小笠原海運までご相談ください（母島 3 泊希望の方に限ります）**
- お申し込み後のキャンセルは、キャンセル料金が発生することがあります。
詳細は**小笠原海運 ☎03-3451-5171** にお問い合わせください。
※ツアーのお申込み、お問合せは、公益財団法人小笠原協会まで
※小笠原海運株式会社での受付開始は平成30年8月31日からです。

